

『ショア』を相続する パトリス・マニグリエと クロード・ランズマン

| | |
|-----|---|
| 著者 | 小山 尚之 |
| 雑誌名 | 東京海洋大学研究報告 |
| 巻 | 15 |
| ページ | 49-60 |
| 発行年 | 2019-02-28 |
| URL | http://id.nii.ac.jp/1342/00001660/ |

[資料]

『ショア』を相続する —パトリス・マニグリエとクロード・ランズマン—

小山 尚之*

(Accepted November 30, 2018)

Inherit Shoah

—Patrice Maniglier and Claude Lanzmann—

Naoyuki Koyama*

Abstract: This article is a translation into Japanese of the dialogue between Patrice Maniglier and the members of the magazine *Critique*, which took place in March 2018. According to Maniglier, *Shoah* is not a documentary film neither that of memory, testimony nor trace. It attempts to give body to a thing which is the “extermination of the Jew in Europe”. Its body consists of incarnations which appear unexpectedly through unconscious trembling of voice, distortion of face and gesture. This film does not concern the past but the present world in which we live. One of the legacies which Sartre and *Les Temps modernes* left is the method of plunging concretely into events without any predetermined political or moral perspective. One may say that *Les Temps modernes* dreams of catching the world itself and *Critique* bets on the knowledge. But Maniglier is discontented with the opposition between them. By means of checking philosophical notions through singularity of events, he thinks that we can surpass such opposition.

Key words: Patrice Maniglier, Claude Lanzmann, *Shoah*, *Les Temps modernes*, *Critique*

はじめに

本稿は、二〇一八年五月『クリティック』*Critique* 第八五二号に掲載されたパトリス・マニグリエ Patrice Maniglier と『クリティック』のメンバーとの対談「二十世紀を相続する：ランズマン、『ショア』、そして『レ・タン・モデルヌ』¹を翻訳したものである。この対談は二〇一八年三月に行われており、『クリティック』のこの号は「クロード・ランズマン《進む力》²と題されたちょっとした

ランズマン特集号となっている。マニグリエの対談のほかにもミシェル・ドゥギー Michel Deguy のエッセイ、マルク・スリズエロ Marc Cerisuelo、マクシム・ドゥクー Maxime Decout らの論考がある。『クリティック』は書評誌であるから、これらの論考で取り上げられているのは、ランズマンの『パタゴニアの野兎』³、ジュリエット・シモン Juliette Simon が編纂した『クロード・ランズマン：世紀

です」から採られているようである。当該『クリティック』三〇七ページのフィリップ・ロジェ Philippe Roger の序文による。

³ Claude Lanzmann, *Le Lièvre de Patagonie*, Paris, Gallimard, 2009. 邦訳『パタゴニアの野兎』上・下、中原毅志訳、人文書院（二〇一六年）。

¹ “Hériter du XX^e siècle : Lanzmann, *Shoah* et *Les Temps modernes*”, *Critique*, mai 2018, n.852, pp.416-428.

² Claude Lanzmann « Une force qui va ». « Une force qui va » 「進む力」という表現はヴィクトル・ユゴー Victor Hugo の戯曲『エルナニ』の中のエルナニの台詞 « Je suis une force qui va » 「私は進む力

の見者』⁴、エリック・マルティÉric Martyの『クロード・ランズマンの『ショア』について』⁵といった著書である。

マニグリエは、「哲学者ランズマン：『ショア』の肉体への序論」⁶という長文の論文をジュリエット・シモンが編纂した『クロード・ランズマン：世紀の見者』に寄稿しており、この論文をめぐって、『クリティック』のメンバーとの対談が始まっている。そこでは『ショア』に、記憶、証言、痕跡、歴史、ドキュメントの映画、を見る従来の見方に対するマニグリエの反論が展開されている。またマニグリエは、数年ほど前から『レ・タン・モデルヌ』の編集委員にもなっており、その立場から『クリティック』と『レ・タン・モデルヌ』との違い、『レ・タン・モデルヌ』の独自性、またランズマンとサルトルとの違いが論じられている。

奇しくもランズマンは今年の七月五日に九十二歳で亡くっている。期せずして『クリティック』のこの号はランズマン追悼という形になっている。

尚、本稿における脚注はすべて翻訳者によるものであり、原文には一切注がないことをあらかじめお断りしておく。

パトリス・マニグリエ

二十世紀を相続する：ランズマン、『ショア』、そして『レ・タン・モデルヌ』

『クリティック』——パトリス・マニグリエさん、あなたは一九七三年のお生まれで、哲学者であり、パリ大学ナンテール校の准教授、そして数年前から『レ・タン・モデルヌ』の編集委員会の活発なメンバーと知られておいでです。あなたのお仕事としてとくに知られているのは、構造主義、現代フランス哲学、映画についての思索に関するものです。あなたは、ジュリエット・シモンによ

って『世紀の見者』（ガリマール出版社、二〇一七年）というタイトルのもとに編集された、クロード・ランズマンを讃える共著の中で「哲学者ランズマン」という長い論文を『ショア』に捧げておられます。まず単純に、あなたはどのようにしてクロード・ランズマンという人物とその作品に出合ったのか、そのことをお聞きすることから始められればと思います。『ショア』を通してでしょうか？あるいは『レ・タン・モデルヌ』を通してですか？

パトリス・マニグリエ——もちろん『ショア』を通してです。本人そのものではなく、少なくとも作品の制作者としてのランズマンであれば。本人とはもともとずっと後になってから初めて会いました。一九八〇年代の終わりにリセにいた私の世代の多くと同様、私がランズマンという名前を初めて聞いたのはリセにおいてであり、『ショア』の監督としてでした。あの映画には短いヴァージョンがあって、それが教育に用いられていたのです。実を言うとそれを全部見た確信はないのですが、奇妙なことに私はそれがなんであるか分かった、あるいは少なくとも分かっていると思っていました。私にとってランズマンはまずは威嚇的で謎めいた一種のモニュメントでした。二十世紀の避けて通ることのできない一つの事件を正面から引き受けることと、純化され引き算的でいかめしい作品とが混合したもの、政治的な良識と審美的な過激さの不思議な混淆でした。二十世紀の遺産を相続する努力をしようとする若者たちにとって、消化すべきことが二つありました。それは「ユダヤ人の絶滅」⁷とモダニズムです……。それか

⁴ Juliette Simon (éd.), *Claude Lanzmann, Un voyant dans le siècle*, Paris, Gallimard, 2017.

⁵ Éric Marty, *Sur Shoah de Claude Lanzmann*, Paris, Éditions Manucius, coll. 《Le marteau dans maître》, 2016.

⁶ Patrice Maniglier, “Lanzmann Philpophe, Introduction au corps - Shoah”, dans *Claude Lanzmann, Un voyant dans le siècle*, op. cit., pp.59-133.

⁷ フランス語で「ショア」には二つの表記がある。

一つは女性形の定冠詞のついた *la Shoah*。もう一つは冠詞なしでイタリック体になっているか男性形の定冠詞のついた *Shoah, le Shoah* である。前者はナチスによって犯されたヨーロッパ・ユダヤ人の絶滅を指し、後者はランズマンの映画のことを指している。男性形の定冠詞は *le film de ~* という表現のう

らある日、私は本気になって『ショア』を見たのです。圧倒的なショックでした。と同時に人々がこの作品について語っている言葉はまったく的外しているという感情も持ちました。

『レ・タン・モデルヌ』の方はもっと後にやって来たのです。確かに私は私の初期の論文の一つをこの雑誌に発表しています。二〇〇〇年のことです。タイトルは「終わりなきヒューマンイズム」といいました。私はこの雑誌がすぐに好きになりました。他の総合雑誌の間にあってこの雑誌はほとんど唯一、知的な創造性と、二十世紀「知識人」の多かれ少なかれ想像上の顔となっていた批判的な進歩主義との結びつきを保っている、と私は思いました。

『クリティック』——クロード・ランズマンと出会い、『レ・タン・モデルヌ』に招聘されたのはその時ですか？

パトリス・マニグリエ——いいえ。それはサルトル生誕百周年のための、サルトルに関する私の論文が二〇〇五年に出た後です。まず副編集長のジュリエット・シモンが私と会いました。それから私はランズマンの自宅に招かれ、彼ら二人とその論文について議論することになったのです。明らかに私は少々気遅れ気味でした。彼の自宅に入ります。彼は書斎にいました。彼は立ち上がり、例の太い声、今や我々各人の中で語る意識の抑揚の一つになっていると思われるあの声で、私に言うのです。「ああ、マニグリエだね！」「はい、はい、私です……。」「それじゃあマニグリエ、くるっと回ってごらん」「何ですって？」「いや、とにかく、くるっと回ってごらんなさいな、さあさあ、回ってみてください！」私は少し困惑しながら、言われた通りのことをやろうと心に決め、その場でくるっと小さく回転してみせる。私がそれを終えるや否や、ランズマンは、「いやあ、彼はハンサムだ、マニグリエは。彼を採用しよう！」と叫ぶのです。もちろん我々は笑います。これもまたランズマンなのです。あなたの問題がなんであるかを理解し、そんな問題が存在する必要などないことをあなたに示すこのやり方そのものによって、

ちから film de が略されて残ったものであろう。こ

の翻訳では la Shoah を「ユダヤ人の絶滅」とし、

Shoah, le Shoah は『ショア』と訳している。

彼は有能な人間であり、身体と笑いのひとであり、いたずらと愛情の達人なのです。

『クリティック』——『ショア』に戻りましょう。あなたによれば、この作品の関心は「ヨーロッパ・ユダヤ人の絶滅」に関するドキュメント映画を作ることにはありません。あなたはこの映画に、記憶に関わる映画、つまり記憶の義務を見ていません。またそれ以上に、証言の映画、証言（プリーモ・レーヴィ Primo Levi が用いた強い意味での証言）に関わる映画すら見ていません。これはとても大胆なテーゼです。ではこの作品に取り組むための良い準拠とはどのようなものですか？

パトリス・マニグリエ——それは認識論的な枠組み、言い換えれば知の問題です。我々は「第二次世界大戦中六百万人のユダヤ人がナチ体制によって虐殺された」ことを知っていると思っています。しかし現実にはこの事実に対する我々の知識はまったく抽象的なのです。我々は自分たちが何を知っているのかを知らないのです。我々の知そのものがそのことへの接近を遮断しているのです。それは我々が情報を欠いているということではありません。我々は我々の知っているものを「現実化して」いないということです。『ショア』とともに、知の内容は同じままですが、知の様態がすっかり変わります。次に存在論的な枠組みです。『ショア』の問題は現在に関わることであり、いかなる形のもとであれ過去に関わるものではない。そうではなく我々の世界の中での今ここに《ある》何かに関わっており、それが「絶滅」と称するのであることを私は示そうと試みています。それはある種の「こと」であるが、その現実の様態をはっきり浮かび上がらせるのが困難な「こと」でもあると私は主張しているのです。

『クリティック』——『ショア』は「ユダヤ人の絶滅」という出来事自体のどのような表象をも禁じる「表象不可能なもの」の原則に答えるものである、という考えにも、あなたは反論なさっていますね。しかしまさにこの点で、例えばジェラルド・ヴァジュマン Gérard Wajcman、ジョルジュ・ディディ＝ユベルマン Georges Didi-Huberman、ジャック・ランシエール Jacques Rancière らの間でこの上なく激しい論争が起こったのでした。

パトリス・マニグリエ——はい。あの「表象不可能なものという」奇妙な法は、ランズマンが発言し、行っていることをすでに知っていると思っただけに、ますますそれだけ、それらの発言や行為を検討しないで済ませようと欲しているのです——明らかに間違っています！ というのは、ランズマンは、自分にとって重要なのは「ユダヤ人の絶滅」を「表象すること」であり、さらに「受肉化すること」、「再び生きること」、「よみがえらせること」である、と言うのを決してやめたことがないというのが事実なのです。私は論文の中でそのすべてのテキストを引用しています。資料は確定的だと思われます。要するに悪しき読解があったのです。その理由はランズマンの立場の難しさそれ自体に由来します。というのもランズマンにとって、あの「こと」^{ショーズ}は、たとえそれが耐え難いものであるからだけであろうとも、肉体を離脱することを止めず、身体を逃れることを止めないものだからです。しかしまさにそれゆえに、それは再び受肉化されるべきものであるということも間違いではないのです。《あのこと》の痕跡をとどめた世界の中で生きることを受け入れるのは困難です。とすると、その「こと」を捕えるには、空をつかむようにしてであり、例えばひきつった微笑みの中に、硬い声の中に、涙にくれる顔の断片のうちに、自由の女神の沈黙においてさえも、あるいはイスラエルの森とポーランドの森との類似の中などに、捕えなければならないのです。あの「こと」の感覚が我々に戻るのは、つねに不意を突いてであり、遠回しにです。この「こと」をフレームという枠の中に追い詰め、それが逃げるのを妨げる、というのがランズマンの映画の賭け金のすべてなのです。問題は「ユダヤ人の絶滅」が表象可能か表象不可能なのかではありません。問題は「ユダヤ人の絶滅」が性質を変えるべきであるということです。「ユダヤ人の絶滅」は時間の帯状装飾の中に書き込まれるべき漠然とした情報に過ぎなかった。しかしそれは我々の世界の中で他の物事に交じって一つのものになるべきなのです。これは《知覚》の問題です。

『クリティック』——あなたは実際、痕跡、記憶、証言といった存在様態よりも、あたかも「ユダヤ人の絶滅」が結局のところ、厳密に言って我々と同時代のものであるかのように、現在の真ただ中に拡散して毒を含んだ一つの「こと」の、かすかすにぶい存在様態の方を強調なさっていますね。しかしそのことを出現させるためにランズマ

ンは、文学や哲学の道よりむしろ映画の道を選びました……。あのような仕事をうまく運ぶにあたって映画がどういう点で必要不可欠だったのでしょうか？

パトリス・マニグリエ——そうですね、われわれの文化では、何ものかに《肉体を与える》ことが問題となるや、イメージに優位があるように思われます。《イメージにすること》と《肉体を与えること》はほとんど二つの同義語になっています。というのも私のテーゼは実際次の通りなのです。ラ・ショア、すなわち私は「ヨーロッパ・ユダヤ人の絶滅」のことが言いたいのですが、それは一つの現実としてここに、我々のあいだにあるが、その現実には肉体を欠いている。ごらんのように私は肉体と「こと」を区別しています。この世界には肉体を持たない「こと」がある——そこにすべての問題があるのです！ 私の考えでは、この映画の目的は、「ヨーロッパ・ユダヤ人の絶滅」の肉体をつくりだすことだと思います。しかしながらここが事の微妙なところですが、イメージの中に肉体をつくりだすには、目に見えるものを見せるだけでは不十分なのです。また表象不可能なものを支持するものたちが信じていることとは反対に、目に見えるものを挫折に追い込むだけでも不十分なのです。イメージの中に肉体をつくりだすこと、それは、イメージから引き算をすることではなく、反対にイメージに足し算をしていくことなのです。ランズマンの映画は欠如の映画ではなく、むしろ過剰の映画です。「ヨーロッパ・ユダヤ人の絶滅」という肉体が、他の肉体たちに寄生しながら、まさに感覚可能となるような瞬間を集めなければならないのです。それは例えば、トレブリンカの床屋の声であり、ユダヤ人戦闘組織の元司令官のアルコールでむくんだ顔であり、チェルムノからの生還者で教会の出口のところでポーランド人に囲まれているスレブニクの突然不安になる眼差しなどです。「ヨーロッパ・ユダヤ人の絶滅」の肉体は、これらすべての言わばパッチワークのようなものです。この時、「こと」は単なる《存在》^{プレザンス}であることを止めます。「こと」は実際に表象可能となります。これが賭け金のすべてです。

ですから映画の理論家すべてが強調したように、映画とは事物のリアルな持続と体験によって、またその中で作られているという事実が、このことを引き受けるのが可能な映画の特別な能力をおそらく説明しています。というのも肉体の断片は瞬時に噴出するものだからです。重要なのは、言

い損ないや無意識の仕草といった、うっかり漏れ出たものを捕らえることなのです。ですから事物が事物自身によって展開するに任せなければならない。事物固有の時間、それは同時に「ヨーロッパ・ユダヤ人の絶滅」という「こと」を迂回し、あたかもそんな「こと」はここにはないかのようにする事物固有のやり方でもあります。そのような時間を繰り広げるがままにすべきなのです。そのような事物固有の努力を突然逃れ、過剰に噴出し、かくして「ヨーロッパ・ユダヤ人の絶滅」という肉体のある種の器官となるものが捕らえられるためにはですね。

『クリティック』——その一方であなたは、映画監督ランズマンは『ショア』において哲学者の仕事をした、とためらわずにおっしゃっています。それはどういう意味ですか？

パトリス・マニグリエ——なぜかと言いますと、哲学者の務めとは、しばしばそう思われているのとは反対に、まさに抽象的なものを具体的なものへ移行させることだからです。ヘーゲルが言っていたように、抽象的であり、一般性において作動し、単独的なものを習慣の中に沈めてしまうのが常識というものです。哲学は知の中で行為を遂行しますが、それは我々にたいして知を肉体で復元するためなのです。つまり重要なのは知を肉体化することなのです。そのうえ哲学には、存在の登録簿をたえず広げてゆく能力があります。存在に関する我々の非常に個人的な先入観を哲学は対象とします。我々が永遠であると信じているもの、すなわち典型的に「現実」といえるものを何が変化させるのかを見せる試みほど、単独性を捕らえるのによいやり方は他にありません。これゆえに逆説的ですが、哲学とは真に単独性を捕らえるための技法なのです。この二つの観点から、厳密な意味で——また最も真正なサルトル的な意味において、ランズマンは哲学者の仕事をしたのです。

『クリティック』——哲学者ランズマン、いいでしょう。しかしなぜ歴史家ランズマンではだめなのですか？ ピエール・ヴィダル＝ナケ Pierre Vidal-Naquet は、「歴史にたいする《ユダヤ人の絶滅》の挑発」(一九八八年)でこう書きました。「どんなものであれ歴史の言説は、スピノザが「コンカテナチオ」concatenatioと呼んだ、原因と結果の連鎖を免れることは困難である。[……] 歴史の言説にはあらゆる奸策が可能である。チェルムノで何か新しいことが起こっていたことを隠蔽する

ことから成る重大な奸策も含めて。」ところで『ショア』が動き始めるのがまさにチェルムノにおいてです。この歴史家が上のくだりで参照しているのはこの映画です。彼はこの映画のうちに「ヒトラーによるジェノサイドという主題のフランスで唯一の偉大な歴史的な作品」を見えています。あなた自身は、歴史的な物語や歴史的な説明に対するランズマンの拒絶や、「ユダヤ人の絶滅」に関するどんな因果論にも向けられる彼の疑念の方を強調なさっています。出来事に関するこの(哲学的な)問題に対して、現実的に理にかなった歴史を書く(あるいは映画を撮る)にはどうすればよいのですか？

パトリス・マニグリエ——大きな問題です。歴史と哲学の関係という問題ですね……。この点については微妙ですが、非常に興味深いある種の誤解があるように思われます。確かに歴史においても哲学においても、因果関係とか意味といった概念(前者はどちらかという歴史寄りであり、後者は哲学寄りですが)に抗して、出来事^{エヴェヌマン}というカテゴリーが、この二つの学問にとっていわば充足的な対象として出現しました。従って歴史家は、フーコーが哲学者として、あるいは「系譜学者」としてそうしようとみずから提起したように、出来事を再構築することで満足することもあり得るわけです。歴史家の興味を引くであろうものは、出来事とその外部のコンテクストにいかにか挿入されるのかとは独立した、あるがままの出来事の展開の方です。それは行為者がその出来事を知覚する、しかも内部からそうしている様態の方です。これに対して哲学者としての私の興味を引くのは、出来事の力学を、出来事化の内在的なメカニズムに注意を払いながら復元することではありません。そうではなく、出来事が示す差異の方であり、それ固有の新しさの部分の方です。ですから私は、事実の総体に興味を抱く必要はないのです。そうではなく、時には最も基本的なカテゴリーとなるもの、まさしく出来事、事実、因果関係、主体性もそれに含まれますが、そうしたカテゴリーが当の出来事によって触発され、刷新されるやり方を個別にとらえ直すことを目指しながら、一つの診断を私は試みなければならないのです。これは、ランズマンがラウル・ヒルバーグ Raoul Hilberg のアプローチの仕方との関りで、自らのそれを対照させる際に、ランズマン自身によって完全に明らかにされている点です。ラウル・ヒルバーグは『ヨーロッパ・ユダヤ人の絶滅』の偉大な歴史

家であり、ランズマンは彼に依拠していますし、映画の中にも出てもらっていますが、ヒルバーグは出来事を説明も解釈もせず再構築しようとし、ランズマンはその「こと」を現在に狩り出そうとし、それ固有の存在様態を感じさせようとしています。

『クリティック』——ランズマンといえば、それはまた『レ・タン・モデルヌ』でもあります。サルトルはこう言っていました、「われわれはただ、いつかそのうち、一般路線を引き出せればと願っている」。あなたは『レ・タン・モデルヌ』に一般路線を見えていますか？ あなたの目には『レ・タン・モデルヌ』にはランズマン的な方法が存在していますか？

パトリス・マニグリエ——一九四五年十月の『レ・タン・モデルヌ』紹介の中でサルトルがあなたの引用なさったフレーズを述べた時、彼はまさにこの雑誌には路線はない、ただ一つの方法があるだけだ、と言おうとしていたのです。当時彼はこの方法を、「全体的な」あるいは「統合的な」方法と呼んでいました。その方法とは、どんな問題にも「具体的な」やり方で取り組むというものでした。ある意味で私が先ほどランズマンに関して述べたものと全く同じものです。つまり問題の「単独性」とそれが置かれている性格を強調することです。それには、主体性を個別に呼び止めるそのやり方によって、どんな主体性にも関わり得る体験のすべての次元が含まれます。重要だったのは、そのたびごとにすべてを再作動させながら、事後的に立場の決定なり路線なり決断が出現するさまが見られるように、政治的・道徳的な原則からは出発せず、そこから方向性を指示しないようにする。そうせずに、できるだけ深く世界の中に潜ることだったのです。我々は世界を変える力を必ずしも持っていないが、サルトル的な意味で「選択する」べき世界をもう一度所有してみることが出来ます。自由とは、賛成か反対かを決断することではなく、自らに固有の状況の責任を引き受けることなのですから、何よりもまず重要なのは、われわれが状況と関わるときの「抽象的な」やり方、つまり理解するため、また判断するために、我々がよそから持ち込んでいる道具すべてを取り払う努力をしながら、状況の中に我々自身をしつかりと置いてみることなのです。

こうした観点から見ると、あの雑誌は部分的にはサルトル的なものであり続けているように思われます。あの雑誌に路線はない。しかしさまざま

な単独性を正当に評価するという、方法のような何かがあります。ある意味でこの方法は否定的なものであるとも言い得るでしょう。つまりそれは、指導して覆すことが問題となるような、方向を変えるべき権力に対する、あらかじめ決定された関係の見通しの中に、出版という行為を組み込まない、というものです。というのも、人がなんと言おうと、大部分の雑誌は、おそらく一つも「イデオロギー」を持ってはいませんが、しかし明らかに、多少とも首尾一貫して、さまざまな程度に、『イデオロギーを作っている』からです。これらの雑誌は、ある時は「世論」と呼ばれているものに圧力をかけようとし、ある時は意思決定者たちを啓蒙しようとしています。要するに、それなくしてはいかなる現代国家権力も機能することができない道徳的な要素に働きかけようとしているのが感じられるのです。これはもちろん『クリティック』のケースではなく、『デバ』、『エスプリ』などのケースです。この点で『レ・タン・モデルヌ』は、非常にエキセントリックであると私には思われる立場を取っています。純粋な知の王国の中で超然としているわけでもありませんし、やがて各省庁の書類の上にたどり着くであろう問題に対する「世論」を啓蒙することに貢献しなければならないといった必要性にも取りつかれておりません。この雑誌は権力の中心からは相対的に離れています。これはある意味で弱みですが、しかし強みでもあります。我々は、メディアの空間の中で構築された「アクチュアリティ」の問題と他の人々以上につながっているわけではありません。しかしおそらく、それだけになお、やはり我々にとって重要であると思われる問題を構築する可能性も有しているのです。どういう問題かと言えば、最近の実例をいくつか挙げると、アルキ⁸、六八年以後の既得権益者層、フランスによるアフリカでの戦争などです。

この雑誌には、私にとって、非常にサルトル的だと思われるもう一つ別の側面があります。それをこの雑誌の有している自由と呼ぶことが出来るでしょう。フォーマット、スタイル、内容、方向性などに関して、これほどの自由を許容しているのはこの総合誌ただ一つだと思います。三ページのテキストを書くことができますし、八十ページのテキストも書くことができます。詩も、時評も、

⁸ アルジェリア独立戦争でフランス側に協力して戦ったアルジェリアの兵士のこと。

アラブに好意的な文章も、ロシアから「解放された」ウクライナのファシスト分子に我々の注意を惹きつける文章も書くことができます。生な側面、「資料」の側面があります。これは今日の情勢においては本当に特異なことだと私には思われます。他の雑誌より取り締まりのゆるい雑誌なのです。この点でこの雑誌はその編集長に本当に似ています。なにしろランズマンはあらゆる意味において馴致できない人物なのですから。彼はいかなる大義にも奉仕しません。いかなる侵犯も恐れませぬ。ある種の心情の真実、良き慣例、良き作法の中にずかずかと割り込むこともあり得るのです。ランズマンにはパンク的な、ほとんど絶対的自由主義者のような側面があります。彼はされるがままにはなりません。これは彼の最近の映画の一つ『ナパーム』でとてもよく感じられる何ものかです。その映画で彼は、一九五〇年代にフランスの知識人代表団とともに訪問した北朝鮮での、若い女性とのつかの間の官能的な出会いを語っています。専制政治に抗する闘いは、抽象的な原理・原則のレベルでなされるのではないのです——その反対にランズマンは、犠牲者となっているあの人民にたいして同情を表明し、アメリカ人が行使した朝鮮戦争の暴力を我々に思い出させています。闘いは差し迫った性的な欲望の中で行われるのです。政治的な問題が個人的な事柄のうちにすべて受肉化するわけです。あの世紀の複雑さの全体、根本的に決定不可能なものであるリアルなものの厚み全体が、勇気、ユーモア、妥協しない欲望を唯一の支えとして、すべて引き受けられるのです。《正確さ》への要求も、ランズマンに、そして彼の担っているものに特徴的なものです。——我々は事実について好き勝手なことを言っているわけではない、我々のレポートするものは正確である、このような正確さそれ自体に効力があるのだ、これはほとんど『ショア』のモラルです——。また個人的な自由に対する本能的な執着があり、それは形式的な次元においても同様です（それゆえに彼は、サルトルが一九七〇年代に支持していた毛沢東主義者たちの「人民の大義」⁹に対して決して好

⁹ ここでマニグリエは“justice populaire”「人民の正義」と言っているのだが、ランズマンの『パタゴニアの野兎』には“la cause du peuple”「人民の大義」とはっきり書いてあるので、訳者は「人民

意的ではなかったのです)。また同様に、反乱にたいするとても純粋な好みがあります。この雑誌がもう何年も前から、フランス領アンティル諸島や、アラブ諸国、ブラジルにおいて発生した反乱や、ニュイ・ドゥブー（夜・立ち上がり）¹⁰に至るまでの多くの反乱を追ってきたというのはどうでもいいことではありません。この雑誌には、人間の不従順の使用権に配慮する、ある種の警戒状態があるように思われます。

『クリティック』——総合雑誌全体を眺めてみた場合、あなたは哲学者たちの振り分けられ方をどのようにご覧になっていますか？ 『クリティック』と『レ・タン・モデルヌ』のケースを取り上げてみましょう。一方にバタイユ Bataille、他方にサルトル Sartre とその支持者たちがいます。しかしそれから数十年たって一九六〇年代、一九七〇年代には、『クリティック』の方にフーコー Foucault、リオタール Lyotard、ドゥルーズ Deleuze、セール Serres、それからブーヴレス Bouveresse がいました。同じ時期にこれと向き合う誰が見出されるでしょう？ またあなたは、知、政治、知の政治との関係において、サルトルとバタイユ、あるいは彼らの後継者たちの間で、一種の棲み分けがあったという考えに同意なさいますか？

の大義」の方を選択した。『パタゴニアの野兎』下、p.151 を参照せよ。

¹⁰ 二〇一六年の三月にパリの共和国広場に集まった若者たちから始まった反・グローバリズムや反・新自由主義などを訴えた運動。その後フランスの各地に広がる。『レ・タン・モデルヌ』は二〇一六年十一月・十二月の第六百九十一号で「ニュイ・ドゥブーと我々の世界」Nuit debout et notre monde という特集を組んでいる。マニグリエはその号の序文を書き、「一つの思索の体験」Une expérience de pensée という記事も寄稿している。

パトリス・マニグリエ——歴史的にみて違いははっきりとしています。その違いを次のように言い表せると思います。『クリティック』は知に賭けています。非常に一般的な意味に解された、世界に対しては二次的な関係を持つものとしての知にたいしてです。この雑誌は世界を直接的には語りませんが、世界にたいして一つの知の接続が試みられる著作という、世界の中の個別的な現実を語ります。これとは逆に、サルトルの『レ・タン・モデルヌ』は、世界を直接的につかむことを夢見しています。それは体験に様々な権利を取り戻させるのです。またこの雑誌は、このように《世界をつかむこと》をまさに可能にする、——文学的であれ、科学的であれ、哲学的であれ……——、あらゆる類の介入に関心を抱いています。このような違いはサルトルとバタイユの哲学の違いのうちにはっきり書き込まれていると思われまふ。サルトルは、異論はありますがやはり現象学者であり、世界を、そのあらゆる豊かさ、色彩、味わい、脈を打つ肉体とともに、再発見することができると思っています。それは、根源的な体験から再出発することによってなのです。あるいはむしろそのような体験を、抗し得ない地平として、つまり状況を選択し、その状況の中で自らを選択することが避け得ない地平として、目指すことによってなのです。それは、どんな主体性とも直接的に（あるいは間接的に）コミュニケーションすることによってなされるのです。ゆえに、媒介物を飛び越えたいという誘惑、あるいは、体験という、より広大で根本的な何ものかのうちにそれらの媒介物を統合しようとする誘惑があります。バタイユもまた体験について語り、同じように非媒介的なもの、直接的な把握を求めています。しかしこの直接性は、『内的体験』の中で彼が説明しているように、ある種の空虚、恍惚、形而上的な一点に通じており、それは、サルトルが抱きしめようと望んでいる世界の色鮮やかで豊かな厚みの何ものをも有していないのです。バタイユにおいては知と体験の分離があります。一方には内容がありますが、他方にはないのです。体験は知を縁取りますが、知は非=知の中に沈んだ島のようなものとして現れるのです。サルトルは体験と知の二つを一つにしようとして夢見しています。このような観点から見ると、体験の哲学あるいは生の哲学と、概念の哲学あるいは知の哲学を、ご承知のように対立させたフーコーが、『レ・タン・モデルヌ』よりも『クリティック』の方をより身近に感じたことが理解できます——そしてこれは「構造主義」世代、あるいは「ポスト構造主義」世代の全体にも言えることで

す。しかしながら私という、構造主義と戦後のフランス哲学の歴史家は、このような対立に不満足を覚えることしかできません。『レ・タン・モデルヌ』は、思われている以上に、構造主義とより複雑な関係を結んでいます。レヴィ＝ストロース Lévi-Strauss の近くにおいて『レ・タン・モデルヌ』のメンバーだったジャン・プーイヨン Jean Pouillon の存在が、その間の橋が決して断たれていなかったことを示しています。五十年経った今、我々はこのような対立を乗り越えることができると私は思っています。そうするための一つのやり方は、私の側ではそうしようと努めているのですが、構造主義は俯瞰的な大きな全体の出来事性ではなく、事物の出来事性を捕らえるための方法であることを示すことによってです。このような観点からみると、私はサルトルとの着想の共通性を感じるのです。

『クリティック』——サルトルとの関係を性格づけるのにランズマンは「非・不忠実という進路」*cap de non-infidélité* という表現を用いています。あなたはこの表現をどのようにご理解なされますか？

パトリス・マニグリエ——あの雑誌に入ってからまだ十年しかたっていないので、私には部分的な考察しかできませんが。まず言わなければならないのは、あの雑誌はサルトル的である、ということです。たとえその理由が、そこに多くのサルトル専門家が見出せるにすぎないにせよです。筆頭にジュリエット・シモンがいます。副編集長であり、彼女無しではあの雑誌もランズマンの最近の作品も同じ顔を持っていないでしょう。またジャン・ブールゴー Jean Bourgault やリリアーヌ・カンデル Liliane Kandel のような人もいます。あの雑誌はしばしばサルトルの未刊の原稿や、彼に関する研究を刊行しています。

ランズマンのくだんの表現について言えば、それは、サルトルに忠実であることは不可能であるということがまず言いたいのだと思います。なぜなら時代は変わったからですし、サルトルのあらゆる立場、おそらく全体の方向性すらも、また雑誌の編集長としての活動に彼が与えていた意義をも踏襲する理由はないからです。しかしまた他方では、サルトルを《否認する》必要もないのです。否認はつねに過去と関わるやり方のうちで最悪のものです。それは我々が想起したばかりの、体験の哲学と知の哲学の間の論争にやや見られるものです。たとえ私が自分は哲学的にバタイユやフー

コーに近いと感じるとしても、それは、サルトルを突き動かしていた単独的なものや具体的なものへの情熱と相いれないやり方によってではないのです。その反対に、それもまたあり得るヴァージョンの一つであるように思われるのです。ランズマンは、サルトルと一線を画するたびに、同時に彼の立場の複雑さの総体や、彼のアンガジュマンが時代と状況の中に深く入り込もうとするあの意志とどれほど結びついてきたかを示しています。それから私の注意を引くのは次の点です。サルトルを好まない人々というのは、概して、馬鹿であることを怖れている人々であるように私には思われます。デリケートな人々なのですね。サルトルは愚かさを怖れていませんでした。彼が様々な過ちや愚行すら犯したのは、状況の弁証法的な複雑さ全体を引き受けようとする配慮からであり、疲れを知らぬ寛大さからであり、知的な純粋さを保つことへの拒否からなのです。

しかしながらサルトルとランズマンの間には根本的な相違があると私は思います。サルトルはその全生涯を通じて人間たちが互いに争い合うこの世界に近づこうと努めました。彼はある種の作家コンプレックスから完全には解放されていないのです。この問題がランズマンをかすめたことはおそらく一度もないでしょう。彼は十六歳で武器を手にパルチザンとして人生を始めています。彼はあの世紀にノスタルジーを持っていませんが、彼のすべてはあの世紀に貫かれています。

もう一つ別の、だがここでもまた「非・不忠実」であると私には思われる調子があります。イスラエルに関することです。これは重要な点です。私は次のように考える人々に与する者です。フランスの左翼、あるいは世界中の左翼すら、もしこう言うことができるとすれば、ユダヤ的な事象において賭けられている単独的な何かを、あるいはシオニズムとイスラエルに対するそれら左翼との複雑な関係を、よく理解してこなかった——この理解の欠如は左翼に高い代償を支払わせているし、今後さらに高い代償を支払わせるだろう、というものです。人々は、イスラエルの政治に反対して、イスラエルという国家の存在の正当性そのものにすら反対して、なんでも思ったことを言うことでしょう。反シオニズムが極めて危険な形の反ユダヤ主義の再構成の一点であったことをしっかり記憶しておかない限り、我々は正当な立場を構築することはできないでしょう。イスラエル国家の存在に反対するのは結構ですが、それならば同じ原則の名のもとに、例えばアメリカを解体させることから始めなければなりません……。イスラエル

に向けられている特別な扱いは徴候的です。いづれにしても、この点に関する『レ・タン・モデルヌ』の立ち位置は明白であると同時に孤立しています。これは、同時代人に関する明晰で政治的で知的な立場を再構築するためには、非常に有益な前提条件であるように私には思われます。『レ・タン・モデルヌ』、これも二十世紀のなにがしかの遺産です。しかし問題は、これから人はこれと何をしようとしているのかを知ることです。ランズマンの作品もこの問いの中に含まれています。

二〇一八年三月にエリー・デュリング Elie Duing、ローラン・ジャンピエール Laurent Jeanpierre、フィリップ・ロジェ Philippe Roger らと行われた対談。

おわりに

クロード・ランズマンの映画『シヨア』をどのように相続するか？ それを歴史的なドキュメンタリーとして見るのがよいのか？ 記憶に関わるもの、証言に関わるもの、表象可能なものを表象不可能なものに追い込むものとして見るべきなのか？ パトリス・マニグリエの答えは明快だ。『シヨア』は「ヨーロッパ・ユダヤ人の絶滅」という

「^{シヨア}こと」に肉体を与えようとするものなのだ。

我々にとって「ヨーロッパ・ユダヤ人の絶滅」という「こと」は抽象的な知識や情報のままにとどまっている。ランズマンはこの抽象的な「こと」に肉体を与えようとする。ただしその手法は、精神分析家が患者の意図せざる言葉や無意識的なしぐさを徴候的に読み拾っていくように、イメージの中に突然ほとばしる思いがけないもの、声、表情、しぐさ、風景の中に予期せぬ形で噴出する過剰なものをカメラの中に捕らえることによってなのである。このように肉付けされた「ヨーロッパ・ユダヤ人の絶滅」は、過去に起こった事実に向かうのではなく、いま現在の我々の中に潜在的に偏在する暴力として感知されるべきなのだ。従って『シヨア』は過去の想起でもなく証言でもなく復元でもなく、今の我々の世界の中への受肉なのであるという。しかしその肉体は断片的、無意識的、部分的にしか存在しないものでもある。

受肉 incarnation という観念はきわめてキリスト教的なものだ。イエス・キリストという身体は聖典の言葉が受肉したものである、というのがその基本的な考えであろう。ユダヤ教やイスラム教に言葉が受肉するという思想はない。言葉を「預かる」人がいるだけである。しかしランズマンの考

える受肉は、「ヨーロッパ・ユダヤ人の絶滅」から逃れてきた、絶滅収容所のガス室内で起こったことの間近にあった人々の言葉から、断片的で、個別的で、特殊で、単独的な受肉の切れ端を捕らえることだった。「アブラハム・ボンバの涙は真実のしるしとして、受肉そのものとして、血と同じぐらいに私には貴重なものとなった」¹¹とランズマンは言う。従ってランズマンの考える受肉は、十全な身体を構成するものではなく、マニグリエの言うように部分的な断片からなるパッチワークであるのだと言えるだろう。

しかしランズマンはユダヤ人であるのになぜ受肉というキリスト教的な観念に違和感を覚えないのか？ ユダヤ教には受肉の思想はなく、またそれは偶像崇拝を禁じるものであるのに？ その理由の一つは、彼がユダヤ人としてよりもフランス人として育ったということがあるかもしれない。「ある意味で、私は古いタイプのフランス人である。いずれにしてもユダヤ系フランス人の多くよりは古いフランス気質の持ち主である。私の父親は一九〇〇年七月十四日に生まれ、私の家族は十九世紀末からフランスに住んでいる。自分がしっかりとフランスに根を張っているという自覚があるために、二つの大戦の間、あるいは第二次世界大戦後にフランスにきた比較的新しい帰化ユダヤ人ほどには、イスラエルは私にとって深刻な問題にはならなかった」¹²と彼自身が語っている。であるから彼が大声で詩を叫ぶとき、それはランボオの『地獄の季節』でありユゴーの『諸世紀の伝説』なのだ。このような古いタイプのフランス人には受肉という観念は身近であったはずだ。一方にはジェラルド・ヴァジュマンのような人がいる。彼は、ジョルジュ・ディディ＝ユベルマンとの論争¹³で、イメージそのものを、フェティッシュ化（偶像化）を誘発するものであるとして告発し、「ヨーロッパ・ユダヤ人の絶滅」は表象不可能で

¹¹ 『パタゴニアの野兎』下、p.196。

¹² 『パタゴニアの野兎』上、p.269。

¹³ ジョルジュ・ディディ＝ユベルマン『イメージ、それでもなお』平凡社（二〇〇六年）の中の「イメージ＝事実あるいはイメージ＝フェティッシュ」の章を参照せよ。

あり、いかなるイメージも禁じられるべきである、と言う。言わば彼は、偶像崇拝を忌むユダヤ的な情熱にかられていると言えるだろう。マニグリエによれば「表象不可能なもの」を支持するものたちの一人である。おそらくヴァジュマンには「ヨーロッパ・ユダヤ人の絶滅」を神聖化したい意図があるのであろう。彼は、神聖なものは表象不可能であるという、ユダヤ的な思考の枠組みの中で考えているように思われる。しかしマニグリエによれば、問題は「ヨーロッパ・ユダヤ人の絶滅」は表象可能か表象不可能なのかにあるのではない。ランズマンが「ユダヤ人の絶滅」を表象しようと行動しているのは明らかであるとマニグリエは言う。とはいえそれは先に述べたように、イメージの中にそのすべてが収まるものではなく、イメージの流れのなかから不意に噴出する無意識的な過剰さを捕らえようとするものではあるのだが。

また「ヨーロッパ・ユダヤ人の絶滅」を表象する場合、ランズマンはそれを過去の想起、思い出として語ることを拒否している。なぜならそれを過去にあったこととしてのみ語るなら、それは容易に神話化し、伝説と化し、はたしてそれが実際にあったのかを疑うといった歪曲を受けるのが避けられなくなるからだ。「今日、ホロコーストは、多くの理由で伝説的になっており、神話的物語の次元に等しくなっている。……。そこで、どんな神話の場合にも起こることだが、ますます大勢の強靱な批判精神の持ち主たちが、「結局のところ、はたしてあのことは存在したのか」という疑問を提出するに至るのだ。……。これこそ、ホロコーストに関する映画の黄金律が、思い出の拒否と、想起の拒否でなければならない、という理由なのである。ホロコーストを主題とする作品を制作しようという場合に犯しうる、最悪の道徳的、芸術的犯罪は、ホロコーストを過ぎ去ったものとみなすことである。……。私が制作する作品は、反神話の作品であり、すなわち、ホロコーストの現在についての調査である」¹⁴とランズマンは言う。証言者たちの言葉が突如受肉する瞬間、それは、マニグリエの言う通り、それを見ているいま現在の我々に関わるものであり、いま現在の我々の世界の中にある潜在的な暴力の受肉でもあるのだ。

¹⁴ クロード・ランズマン『Shoah』^{ジョア}高橋武智訳、作品社（一九九五年）、「出会うまでに十年の歳月を要した日本の読者に」pp.5-6。

このような暴力性を、歴史的な因果関係による説明、すなわち歴史の必然といったロジックで覆うことにも、ランズマンは抵抗を示している。なぜなら時間軸に沿った因果関係の中で「ヨーロッパ・ユダヤ人の絶滅」を説明してしまうと、その出来事^{エヴェヌマン}が有する単独的な暴力性が弱められてしまうからである。ランズマン自身こう述べている。「現在までのところ、ホロコーストを取り上げようとしたすべての作品は、歴史と年代記の助けを借りて、この出来事が自然のうちに出現したかのように描こうと試みた。まず、一九三三年、ナチの権力掌握から話を始める。あるいは、もっと早く、十九世紀ドイツにおける反ユダヤ主義の諸潮流（人種論的イデオロギー、ドイツ国民意識の形成などなど）の説明から始め、年を追ひ、段階を追って、いわばほとんど予定調和的に絶滅政策まで行き着こうと試みるのだ。あたかも、六百万の男女と子供たちのせん滅が、これほどの大量殺戮が、自然に産み落とされるのが可能だともいうように。……。絶滅政策は、自然に産み落とされるものではない。そのようなものとして描こうとすれば、絶滅の現実性を、ある仕方では否定することになる。暴力の突発性を否認すれば、暴力の冷酷極まるむき出しの姿に衣をまとわせ、美しく装わせようということになる。したがって、暴力の真の姿を見まいとし、暴力が帯びる不毛で、かつ比較を絶する側面の直視を否認することになる」¹⁵。これゆえにマニグリエは、ランズマンのうちに歴史家を見るよりも、哲学者を見ることを選択した。歴史家は出来事を再構成するだけで満足する。しかし哲学者は出来事を具体化し、その単独性を強調する。マニグリエによれば、哲学者とは、抽象的なものを具体的なものへ移行させ、常識と呼ばれる抽象的なものを触発する単独的なものを捕らえる者だからである。

このように見てくると、パトリス・マニグリエはクロード・ランズマンの『ショア』を非常にまっとうに相続しているように思われる。同時にマニグリエは、サルトルが『レ・タン・モデルヌ』に残した遺産、すなわちどのようなものであれ前もって決定された政治的・道徳的な路線なしに、また世論や意思決定者たちを啓蒙しようとする意図なしに、問題の現実^{エヴェヌマン}に具体的に沈潜するという方法をも相続している。彼によれば、この方法こそ『ショア』の方法であり、『レ・タン・モデルヌ』

の方法でもある。出来事^{エヴェヌマン}の単独性を捕らえるにはあらかじめ出来上がった概念をもって臨んではならないということであろう。そしてその過程を構成する事実よりも、その単独性が従来の哲学的概念にどのような触発をもたらしているかを見るのが哲学者の務めだということだ。

『レ・タン・モデルヌ』と『クリティック』。サルトルが創刊した雑誌とバタイユが創刊した雑誌だ。一方は現実世界に直接介入しようとし、その世界そのものを抱きしめようとする。他方は世界そのものの把握よりも、世界に接続される知に焦点を当てる。構造主義、ポスト構造主義以降の世代は、『レ・タン・モデルヌ』よりも『クリティック』の方をより身近に感じてきた、とマニグリエは言う。しかしマニグリエは、五十年経った今、『レ・タン・モデルヌ』と『クリティック』との間のこのような対立に不満しか覚えない、とも言っている。彼自身、確かに『クリティック』の方をより身近に感じていたとはいえ、『レ・タン・モデルヌ』の具体的なものへの沈潜、出来事の単独性を捕らえようとするそのパトリスは高く評価しているのである。知の哲学に生の哲学を対立させるのではなく、それらの間の共通性を浮かび上がらせること、それがまた、マニグリエが『クリティック』に登場した理由の一つなのでもあろう。

¹⁵ クロード・ランズマン、前掲書、pp.3-4。

『ショア』を相続する

—パトリス・マニグリエとクロード・ランズマン—

小山尚之

(東京海洋大学学術研究院海洋政策文化学部門)

要旨: 本稿は、二〇一八年三月に行われた、パトリス・マニグリエと『クリティック』のメンバーとの間の対談を翻訳したものである。マニグリエによれば、『ショア』はドキュメンタリー映画ではないし、記憶、証言、痕跡の映画でもない。それは「ヨーロッパ・ユダヤ人の絶滅」という「こと」に肉体を与えようとする試みである。その肉体は、証言者たちの無意識的な声の震え、表情の歪み、しぐさなどを通して、不意に噴出する受肉から成る。またこの映画は「ヨーロッパ・ユダヤ人の絶滅」を過去に関わるものとしてでなく、いま現在の我々の世界に関わるものとして表象している。サルトルと『レ・タン・モデルヌ』が残した遺産は、マニグリエによると、前もって定まった政治的・道徳的見通しなしに、出来事の内側に具体的に沈潜するという方法である。『レ・タン・モデルヌ』は世界を把握することを夢見、『クリティック』は純粋な知に賭けている。しかしマニグリエはこのような対立に不満を抱いており、哲学的概念を出来事の単独性によって検証するというやり方によって、このような対立が乗り越えられるのではと考えている。

キーワード: パトリス・マニグリエ、クロード・ランズマン、『ショア』、『レ・タン・モデルヌ』、『クリティック』